

ヘッベルの戯曲『ギューゲスと彼の指輪』について

—— 反人道的権力犯罪 ——

清 水 純 夫

1

東洋のある国の王女で絶世の美女ロドベを妻としたリュディアの王カンダウレスは、彼女の国の掟に縛られて人前に姿を現わそうとしない王妃の美しさを他人にも見せて羨ましがられたいために、友人で臣下のギリシア人ギューゲスに姿を消す魔法の指輪を渡して夫婦の寝室に忍び込ませ、王妃を覗き見させる。だがその事実を知った王妃はギューゲスに、王を殺害すれば彼と結婚するが、もし断れば自分は自害すると決断を迫る。ついに彼は王を殺害し彼女と結婚するが、しかしその直後、彼女は自害する。これが、ヘッベルが1853年に着手し、翌1854年に完成した戯曲『ギューゲスと彼の指輪』の内容である。

カンダウレスもギューゲスも紀元前700年頃に実在した歴史上の人物と言われている。ヘロドトスの歴史によると、ロドベを覗き見したギューゲスにロドベは気付き、ギューゲスに彼が死ぬか、或いはカンダウレスを殺すかの二者択一を迫り、結局、後者を選んだギューゲスによって王は殺され、ギューゲスはロドベと王位の両方を獲得したとある⁽¹⁾。またプラトンの『国家』でもこの話が扱われているが、それによるとギューゲスは、指輪を手に入れ、王の使者となり、その後ロドベと不義密通し、共謀して王を殺害し、ロドベと王位を手に入れたとある⁽²⁾。いずれもロドベとギューゲスは結婚し、結婚生活がその後も続くというもので、この点は結婚直後に自害するヘッベルの作品と決定的に異なる。しかもヘッベルは創作にあたりヘロドトスとプラトンの作品を参照していることから、ロドベの自害はヘッベル独自の改作と言える。それゆえ何故ヘッベルはロドベを自害させているのかが彼の作品解明にあたって重要なポイントとなろう。このことを念頭に置いて、以下、作品分析を試みることにする。

2

カンダウレスはヘラクレスを先祖とするリュディア王国の王である。しかし彼は武勇に秀でた英雄でもなければ軍事力で領土を拡大していく野心家でもない。そのことがヘラクレスを先祖に戴く民衆には不満である。カンダウレスが魔法の指輪を使って姿を見えなくして立ち聞きした時の民衆の不満について語る彼の、「私は神々の頭の像の付いた四角柱の里程標の見張り、

(1)

或いは国境を拡大しない無能な王なのだそうだ。物差で寸法を測りはするが剣で寸法を測ることはしない男、ヘラクレスの12の行為が他のもっと偉大な24の行為によってとっくに凌駕されてしかるべきなのに、まだそうになっていない責任を負う男だそうだ。」(第一幕、358～363行)と言う台詞がそれを示している。このように民衆は王カンダウレスに不満を抱いているのである。

しかもカンダウレスの忠実な老下僕トースは、「暴動!! その後の敵の襲来、国王の新たな擁立!!」(第二幕、559～560行)が王にとって脅威となっていると警告する。王の弱気につけ込んで敵が攻め込んでくる危険が増しているため、暴動を起こして王の首をすげ替えようという動きがこの国の民衆の間にも広がっているのである。民衆が王の首をすげ替える、ということは王が代替可能な存在であることを示している。王個人には権威は無く、権威があるのは代々の王が所有した錆びた王冠と非実用的な重すぎる剣のみである。これらには伝統の重みが付着しており、それゆえその価値は絶対的で、値段をつけてその価値を測ることはできないし、お金で買い求めることもできない。それは「刻印された貨幣」(第一幕、57行)に果たして名目通りの価値があるのか無いのか不明であるのと同じで、本当に王冠や剣に価値があるのか無いのかは不明のままである。しかし民衆はそれらに絶大な価値を認める。かくしてそれらは権威の象徴となる。カンダウレスはまさに古い王冠と剣があってこそ民衆に王として認められているにすぎないのである。カンダウレスの、「ここでは王はただその王冠ゆえに重んじられ、その王冠はその錆ゆえに重んじられるのだ」(第一幕、50～52行)という発言は彼がそのことを正確に認識していることを示している。

しかしカンダウレスはそれには大いに不満を感じる。彼は自分の人間的な実体に自信があるからである。当然、実体だけで王として認められるべきだと彼は考える。しかし民衆は実体によってではなく王冠と剣によってのみ彼を王として承認する。民衆は彼の実体を全く評価せずに無視しているのである。彼は自分の実体・価値を民衆に認めさせ、自分が代替不可な王であるとして、自分の存在基盤を確固としたものにしたいという強い欲求を抱く。そこで王は錆びた古い王冠や重い剣を拒否し、代わりに宝石がちりばめられた豪華な新しい王冠と軽くて実用的な新しい剣を採用する。不合理な伝統に代わる、言わば合理主義的な新しい価値観の導入と言えよう。新しい王冠はちりばめられた多くの宝石によってその金銭的な価値は誰の目にも明らかである。その金銭的な価値によってカンダウレスの価値が測られる。伝統の重みのみの古い王冠の価値が言わば質で測られたのに対し、新しい王冠は量で価値が測られる。即ち、前者では言わば使用価値が問題であったのに対し、後者ではまさに交換価値が問題なのである。つまり、「一体、永遠であるようなどんなものがベールや王冠や錆びた剣の中に潜んでいるというのか、と誰もが私同様に考える時代がいつか来るであろうと私は確信している」(第五幕、1808～1812行)と公言するカンダウレスの合理主義・進歩主義は、実は、全てをお金の価値に還元する資本主義的な似非進歩主義に他ならないのである。つまり、新しい時代を先取りしようとする彼の行為はまさに資本主義

的原理の導入に他ならないのである。そしてこれが彼にとっては「世界の眠りを覚ます」（第五幕、1816行）行為なのである。

しかし民衆はこれに断固抵抗し、今にも暴動が起こりかねない緊迫した状況が生まれつつある。このままではカンダウレスは王座を失いかねない。それを防ぐためにはロドベの協力が必要となる。即ち、彼は王妃を皆に見せることによって、代替不可の絶世の美女の所有者として、人々の彼に対する評価を絶対的なものにする必要に迫られる。そのため彼はロドベに援助を求めざるをえない。しかし彼女に援助を要請しても自分の生まれ育った国の掟に忠実な彼女がそれを拒否することは明らかである。そこでカンダウレスは、彼女に内緒で、魔法の指輪でギューゲスに彼女を覗き見させようとする。しかしこれは彼女の意向を全く無視した、彼女への思いやりを欠いた行為である。もしカンダウレスがこの計画を実行すれば、彼はロドベをもの扱いしたことになる。それは彼女を宝石と同じように扱ったことを意味する。その場合には代替不可のロドベの価値も交換価値で測られることになる。即ち、彼女は値段のつけられないほど高価な宝石と同じ位の価値の女性だと!! これはまさに彼女に破格の値段がつくことを意味する。カンダウレスは、比類のないこの美の所有者ということになり、皆から羨ましがられる。彼の実体が民衆によって認知されず無視されているのに対し、今度は唯一無二の美の所有者、絶世の美女の所有者として彼は民衆から一目置かれ、尊敬されるようになる。カンダウレスがギューゲスに向かって言う、「私は君の口が、あなたは幸福な人です、と語って初めて幸福になれるのだ」（第一幕、538～539行）という発言は、彼が一目置いているギューゲスがそう言えば民衆全てがそう言ったに等しく、それはカンダウレスにとって幸福であると同時に彼の存在が確固としたものになりうるとの彼の認識を示している。こうして彼は存在の危機を脱することができる。これは古い王冠、言い換えれば人前に入る以前の、使用価値が問題のロドベを、新しい王冠、言い換えれば人前に出た以後の、交換価値が問題のロドベと取り替えることに等しい。だがカンダウレスの行動パターンは一貫しており、そこには矛盾は認められない。かくして彼は計画を実行に移す。しかもロドベの反対を想定している彼は彼女の意向を無視して、彼女の同意も得ずに実行に移す。ロドベの人格の否定と、彼女の依拠する掟の否定から、これはまさに彼女に対する人権侵害にあたる。カンダウレスのロドベへの愛は思いやりを欠いたもので、もともと本物の愛ではなかったことが明らかとなる。しかも彼は、先にも引用したように「世界の眠りを覚ます」と進歩的なことを口にして、自分の行為を取り繕う。カンダウレスのこの動機は、存在が脅かされたやむをえない面があるとはいえ、不純なもので決して許されるものではない。しかし同時に我々はもう一步踏み込んで、ロドベに対する人権侵害のもつ普遍的な意味と掟の中身にもメスを入れなければならない。

ロドベを束縛している掟によれば、父親と夫以外の他の男性に姿を見せてはならないのであるが、このような掟には肯定的な面と並んで否定的な面が存在する。肯定的な面とはもちろん他人に姿を見せることによって他人の欲望を煽り立てないように、ということであろう⁽³⁾。また美を貨幣価値で測られる交換価値に貶めることから守る、即ち、資本主義の商品化から守る、という

面もあろう。しかしそれ以上にこの掟では否定的な面が重要な意味を持っている。女は男たちに姿を見せるな、人前に入るな、等の強要は明らかに女性を家の奥に閉じ込めて、他人とのコミュニケーションも、女性の自立も、男女平等に基づく社会的存在としての女性の存在も否定する家父長制の極端な事例であろう。それゆえこの掟は女性差別・男尊女卑の典型的なものである。まさに理不尽な掟なのである。しかしロドベはこの掟に盲従するために、人前に入ることを拒み、それゆえ試合場へのカンダウレスの出席要請も拒む。そのため彼女は王妃としての公的な義務を果たすことが出来ない。言わば彼女には民衆に対して王妃・公人として存在することは不可能で、カンダウレスにとってのみ彼の妻として、即ち、私人として存在することが可能なのである。

しかし魔法の指輪はこの掟を完全に骨抜きにしてしまった。なぜなら指輪は見られる本人の了解無しに覗き見をすることを可能とするからである。その結果、人前に姿を見せてはならないというロドベの掟は侵害された。しかも、先にも述べたように、ロドベの意向を無視した人権侵害にあたる形でカンダウレスはそれを強行した。これが彼が犯した第一の罪である。ただしこれは掟に関わる者だけに該当する罪である。しかも掟の侵害は、確かにロドベにとっては由々しきこと、許し難いことではあるが、しかし客観的には掟の否定面の打破、即ち、理不尽な掟への盲従から生じる弊害の打破というプラスの面があり、そのため全面的に否定されるべき行為とは言えない。むしろカンダウレスの行為は掟の否定面を彼女に断念させる荒療治とも言える。しかし彼のその行為の動機は掟の否定面の打破を意図したのではなく、ただ自分のためにという自己中心的な不純なものである。それゆえ「世界の眠りを覚ます」という進歩的なポーズで取り繕う彼の態度は偽善のレベルの域を超えるものではない。

このようにカンダウレスの第一の罪は掟打破のプラスの面によって相殺される。それゆえこれだけなら大した問題とはなりえなかったはずである。しかし彼は第一の罪よりはるかに深刻な第二の罪をも犯している。それは単に掟の侵害の罪にとどまらない普遍的な罪である。本人の了解無く覗き見をするという行為は、それがカンダウレスのような権力者が行う場合には権力の乱用であって、スパイ活動に通じる権力犯罪と言わざるをえない⁽⁴⁾。彼は覗き見ばかりか立ち聞きも行っているが、これは現代で言えば盗撮、盗聴、セクハラ等のスパイ活動に該当する行為であろう。魔法の指輪を使っての立ち聞きでは指輪はまさに盗聴器の役割を果たしている。これはスパイされる人間にとってはまさに人権侵害であり、プライバシーの侵害である。言わば人間をもの扱いする非人道的な行為である。つまりカンダウレスの第二の罪は、掟の禁止内容とは次元の異なる、人道に反する行為を行った罪である。それは国家テロとも言うべき恐るべき犯罪である。

カンダウレスは掟を無視したことについて、「世界の眠りに触れることだけは決してしてはならないのだ」(第五幕、1855行)と、即ち、眠りを覚ますのが早すぎたと反省するが、しかし彼の第二の罪の行為は時期尚早とは全く関係の無いことである。しかも彼はそのことに対しては無自覚であり、自分の犯した罪の大きさがわかっていない。あくまで掟を犯したことが自分の罪の全てだと考え、その償いをしようとするのである。この点に関して、B. v. Wieseは、「この世の

(4)

制約の中に巻き込まれた人間は自由な決断で我が身を犠牲にすることが、即ち、倫理的な要請に無条件に従うことが可能である。カンダウレスの中でこの認識が熟し、全ての傲慢さが克服された時に彼はシラーの英雄とほとんど同様に命を捧げる覚悟ができた。』⁽⁵⁾と肯定的に評価している。しかしWieseのこの主張には同意できない。事はそんなに単純ではない。カンダウレスの行為には家父長制的な掟を打破するという進歩的な面も含まれており、この点だけをみれば彼が犠牲となる必要は無い。しかし彼はそのことには無自覚で、掟を破ったという罪のみが彼の頭を占める。それにもかかわらず彼はそれよりももっと深刻な人権侵害という権力犯罪、人道に反する罪を犯したことについては全く無自覚である。だから彼の自己犠牲は真の意味での自己犠牲となっていない。それゆえ彼は英雄ではない、と言わざるをえない。

このように何よりもカンダウレスには人道に反する罪を犯したとの自覚がまず求められる。彼は犯した罪を真摯に償うべきで、その上でのギュエグスとの決闘と敗北による死ならその死は罪の償い・罪滅ぼしとして肯定的に評価されよう。しかしそうではない以上、カンダウレスの死は中途半端な死、言わば犬死と言わざるをえないものである。

3

次にロドベについて分析を試みる。ロドベは掟に極めて忠実であるし、そのことの是非を自分に問うことも全くしない点では掟に盲従と言うべきであろう。彼女はリュディアの国の王妃として嫁いできながら、教条的・盲目的に自分の国の掟に堅くしがみつき、異文化に溶け込もうとはしない。だから彼女は家父長制に忠実な人間で、王妃としての自分の存在意義は夫であるカンダウレスによってのみ確認されると考え、夫には絶対的な服従を誓う。だから彼女自身の自立はありえず、社会的存在としての自己は否定される。彼女にとって夫は彼女の全てとなり、彼女の夫依存は決定的となる。しかも夫への彼女の愛は曖昧である。王という身分に囚われずにカンダウレスという裸の人間を真に愛しているという様子は作品からは窺えない。むしろカンダウレスが王であるという、言わば彼の身分・肩書きがロドベにとっては最も重要なことのようなのである。

同じことはロドベ自身についても言える。彼女の、「女奴隷としてではなく、王の娘として私はこの家にやって来たのだ」（第三幕、1158～1159行）という発言からは、彼女が王家の出身という自分の素性を誇っていることがわかる。つまりロドベは身分制を重視する人間なのである⁽⁶⁾。しかし彼女のこの発言は、夫への服従と自我の自立の無さを考えると、彼女の意図とは裏腹に、彼女が本質的には奴隷と少しも変わらない存在であることを物語っている。以上のことからロドベは、掟や祖国のしきたりを頑なに保持し、王である夫には絶対服従し、未だ自立した自我には目覚めていない保守的で封建的な女性と言うことができよう。

ここでギュエグスがロドベの姿を覗き見するという事件が起きる。覗き見をしたのがギュエグスと察した彼女は、カンダウレスが彼の行為を咎めずに逃亡させようとすることに激しい怒りを

(5)

覚える。「もし犯罪者の血が償いとして流れないのなら、私は自害するように呪われたのです」(第三幕、1147～1148行)というロドベの台詞は自害も厭わない彼女の決意を示している。自害を防ぐにはカンダウレスが「神聖な義務」(第三幕、1151行)に基づいて、「神々に生贄を捧げる」(同、1153～1154行)しかない。こうして夫の煮え切らない態度に業を煮やしたロドベは、逃亡を図ったギューゲスを捕らえさせて自分の前に連行させる。そこで彼女は夫がやらせの張本人であることを聞かされる。それはロドベにとって彼女が依って立つ掟が否定され、彼女の人格が否定されたことを意味する。それゆえ夫に対する彼女の愛と信頼は大きく揺らぐ。「あなたを私に縛りつけている感情の中では、愛よりも、私の所有を自慢したい気持ちの方が強いのではないかといつも私は心配していました」(第三幕、1074～1076行)。もの扱いされた意識がロドベの中に生まれ、彼女の怒りを呼び覚まし、結果的に彼女は自我に目覚めることになる。彼女に存在の意味を付与し、彼女の価値確証的存在であったカンダウレスは彼女にとって今や存在の意味を喪失する。ロドベにとってカンダウレスはもはや必要の無いものとなる。掟が破られたという意識が彼女をここまで駆り立てるのである。

ギューゲスを尋問したロドベはついに彼にカンダウレス殺しを要求する。彼女は、もしカンダウレスを殺害しなければ自害するし、逆にもしカンダウレスを殺害すればギューゲスと結婚すると言って、彼の欲望を揺さぶる。カンダウレスへの愛情がもともと乏しかったがゆえにロドベは彼に復讐することができるのである。彼女の動機はもの扱いされたことに対する個人的な怨念と怒りである。だから決闘で仮にカンダウレスが勝っても彼との関係が続ける気はもはやロドベには無い。「もしカンダウレスが勝者となれば、私は短剣を握んで、この身を彼に縛り付けている絆を解く用意ができています」(第四幕、1578～1582行)というロドベの発言はこの意味で言われたことである。カンダウレスとの関係修復はロドベにはありえないのである。

このようにロドベの行動原理は、掟に忠実に行動するというよりは怨念のままに行動するとなっているのである。これは、同じくヘッベルの初期の戯曲『ユーディット』の主人公ユーディットの場合と同じである⁽⁷⁾。もしロドベが掟に忠実であるなら、カンダウレスが勝てばもはや彼女には絆を断つ必要は無いはずである。つまり、覗き見をしたギューゲスが罰せられて死ねば、彼女を見た夫以外の男はもはや存在しないこととなり、掟は破られたことにはならない。もちろん覗き見の張本人であるカンダウレスとのもともと愛情の乏しかった関係はますます愛情に欠けたものになるであろうが、しかしロドベが自立しておらず、彼に依存せざるをえない限りは、関係自体を続けていくことは可能であろう。だがカンダウレスが勝利したその時でも「絆を解く」と彼女が言っている以上は、彼女は掟にもはや忠実ではないのである。これは、彼女が自我に目覚め、掟に対して自立した女性となり、カンダウレス依存から脱却できたため、掟よりは彼への怒りが彼女の行動を規定したからである。しかし彼女はあくまで掟に忠実な風を装い、掟を盾に行動する。つまり彼女は私的な怨念のために掟をその本来の精神を逸脱してでも自分に都合の良いように利用しようとするのである。「私は今やっとこの掟の根拠を私の胸の中に見い出した」

(第四幕、1271～1272行)という台詞はこのことを示していると言えよう。そして決闘が行われて、カンダウレスはギューゲスに敗れた。復讐を果たしたロドベは喜んでよさそうであるが、しかしそうはならない。

ロドベにとってカンダウレスへの復讐の行動は怨念が全てで、掟は口実にすぎなかった。怨念による復讐と殺害は不純な動機による犯罪に他ならず、掟による免罪はありえない。ロドベには犯した罪がいつまでも纏い付く。もし彼女が本当に掟に忠実であったのなら、罪の意識も結末での彼女の自害も無いはずである。その場合にはこの作品の結末はヘロドトスやプラトンと同じ結末となったことであろう。しかしロドベは、掟に従ってカンダウレスに正当な罰を加えたという印象を表面的には強く与えるにしろ、実際には怨念という不純な動機による復讐は掟を破ったに等しいことを深く自覚している。これまで彼女の支えとなってきた掟はもはや彼女の心の支えとはならない。今やロドベはカンダウレスも掟も失い、存在基盤を完全に喪失する。

しかもロドベには、覗き見という権力犯罪・人道に反する罪を犯したカンダウレスをその罪ゆえに罰したという自覚は無い。もしこの自覚があれば彼女は自分を許すことができたかもしれない。しかしそれが無い以上は彼女には弁明しようのない罪の意識のみが重くのしかかる。それゆえ彼女は罪の償いをしなければならぬと考える。彼女が死ねば、彼女の罪の償いもなされたことになり、汚れを清められた彼女にはカンダウレスとの和解が可能となる。彼が何も持たずに死んだことを聞いたロドベは、「もしカンダウレスが高貴な心情から、誰も新たに罪を犯すことのできない黄泉の国に降りて行ったのなら、たとえもうその敷居をまたいでいたとしても彼に会いたい、そしてこの手でレーテ川の忘却の水を掬ってあげたい」(第五幕、1947～1951行)といって、彼への同情と好意の言葉を口にする。罪の償いをして死んだ身となったロドベは、同じく死んでレーテ川の水を飲んで過去の全てを忘れ、罪から清められたカンダウレスとの関係修復なら可能だと信じているのである。こうしてロドベには今や自害しか道は残されていない。彼女は自己処罰として自害するのである。これが自害の第一の動機である。しかし自害にはもう1つの第二の動機も存在する。それはギューゲスを罰するという動機である。

ギューゲスと結婚した直後に、「私の罪は清められました。なぜなら私を見てもよい人以外は誰ももはや私を見てはいないからです。けれども、今、(わが身に短剣を突き刺して)あなたからお別れします。」(第五幕、1972～1975行)とギューゲスに向かって言うロドベの台詞は、彼女の自害には第一の動機の他にギューゲスを罰するという第二の動機も含まれていることを示している。なぜならギューゲスがカンダウレスに命じられるままにロドベを覗き見した以上は、理由の如何を問わずギューゲスはカンダウレスの共犯者である。それゆえギューゲスもロドベの復讐の対象とならざるをえない。そのために彼女は自分に対するギューゲスの思慕の念を利用して、結婚を餌に彼の欲望を煽り立ててカンダウレスを殺害させ、ギューゲスが幸福の絶頂に立ったと信じた瞬間にそれを粉碎する。このようにギューゲスはまさにカンダウレスを殺す手段として利用されただけで、用済みとなればただちに捨てられてしまう。これが彼女のギュー

ゲスに対する復讐なのである。彼女の自害は彼に対する復讐という点からも不可欠なことなのである。

だからロドベは終始ギューゲスを愛してなどはないのである。彼女は彼を全く評価してもしないし問題にもしていない⁽⁸⁾。しかし彼は自分に対する彼女の好意的な言動を愛と思い込み、自分との結婚の意志が彼女にはあると誤解してしまう。そのため彼は欲望からカンダウレス殺害に駆り立てられる。もちろん彼は、「たとえ王があなたの夫でなかったとしても王は私の無二の親友です。王の友情が度を過ぎていたからといって私に王を殺せるでしょうか？」(第四幕、1532～1534行)と語っているように、表向きは正反対の風を装っているのではあるが。しかしギューゲスにはカンダウレスに絶対に勝てるという確たる自信があるため、決闘は彼の偽善に他ならない。それは惨殺と異なるところはない。このようにギューゲスは口ではカンダウレス殺害を嫌がり、どうしてもやらざるをえないのなせめて公平な決闘で、と言いながらも、心の底では王殺害を強く望んでいるのである。それゆえ彼によるカンダウレス殺害は彼の不純な動機に基づくもので、非人道的な行為を言わざるをえない。

ギューゲスのこの人間的弱点をすでにロドベは見抜いている。彼は覗き見の罪と偽善により痛烈なしっぺ返しを受ける。しかも彼女も彼も意識してはいないが、ここにはやはり、カンダウレスの陰謀に加担して人道に反する罪を犯したことが罰せられた、という事実が存在する。

4

では悲劇を回避するには3人の主要人物たちはどうすればよかったのか。ギューゲスは、ロドベがカンダウレスを殺害しなければ自害すると迫っても、同罪であるカンダウレスと闘うべきではなかった。反対に、カンダウレスもギューゲスもまず自分たちの犯した罪を深く考え、人道に反する罪を自覚し、その上で彼女にたいして懺悔をしてあくまで許しを請うべきであった。

また、特に後半で2人の男を手玉に取るロドベに関しては次のことが言えよう。彼女は、資本主義化が強い非人間化・人間のもの化に対して掟の反資本主義的な面を持ち出してカンダウレスの要求と闘った。「人に見せることのできない宝物を人は褒めることができない!!」(第一幕、516～517行)との考えに基づいてロドベを人に見せようとするカンダウレスの意向にもかかわらず、ロドベはあくまで「人に見せることのできない宝物」、即ち、非交換価値でいたかったし、それを貫こうとした。その意味では彼女の行いは正当なものである。これはカンダウレスのマイナス面と表裏の関係にある。しかし家父長制や、女性の人権を認めない掟の限界には彼女は目をつむり、それを認めようとはしなかった。これはカンダウレスのプラスの面とやはり表裏の関係にある。それゆえロドベは掟と資本主義的な面の双方を乗り越える道を選ぶべきだった。さらに、ロドベはカンダウレスとギューゲスの人道に反する罪を自覚し、掟よりも人道に反する罪の方がより重大な罪だとの認識に到ることで自害をやめ、積極的な生き方に方向転換すべきだった。即

(8)

ち、家父長制を克服し、王妃としての公務に携わることで社会的存在として自己を顕示し、全体と協力・協調して自分を生かす道を選択すべきだった。それはまた公人と私人との調和を可能にしたであろう。そうすれば懺悔したカンダウレスとギューゲスとの3人の協力体制が実現しえたのではないだろうか。

最後に付け加えておくと、この作品の一般的解釈として、王は掟を打破して世界を眼りから覚まそうとした。しかし王のこの進歩的な行為は余りに時期尚早なために失敗した。このこと自体は悲劇だが、この悲劇によって歴史は前進するのだ、ということが言われている。しかし筆者には、実は問題の核心は、王が民衆に認められ、王としての地位を守るために王妃を人目に晒す必要に迫られ、掟を破ったばかりか、王妃の人権・人格を無視し、さらには人道に反する権力犯罪の罪を犯した点にあると思われる。これらは、進歩的とも時期尚早とも関係の無い、普遍的な犯罪である。だから上記の一般的解釈は成り立たない。

*

*

*

21世紀の今日、フランスの公立学校でイスラム教徒の女生徒が教室でもヴェールを着けたままにしていることに対し、公立学校に特定の宗教を持ち込むことに反対する立場と、信教の自由を保障する立場から、激しい対立が生じた。しかし筆者にはそれは単に対立の形式的な捉え方にすぎないと思われる。ここには文化の違いによる民族対立が反映している。即ち、ヴェールの問題の背後には民族主義の問題が存在するのである。しかし民族の伝統や自治権は当然尊重されなければならないが、かといって無条件にそれらが通用するわけではない。ヴェールの場合にもそれは当てはまる。つまりヴェール着用の習慣の中に潜む家父長制や女性差別などの中身にまで立ち入って検証することが必要ではないのか、テロ的報復を恐れずに今こそ人道主義の立場から、ロドペの掟に象徴されるような宗教的伝統の中身にまで立ち入って判断すべきではないのか、というのが筆者の偽らざる感想である。

各民族の伝統に不合理な面が存在する場合にはそれはもちろん改善されなければならない。それが進歩というものであろう。そういう改善への前向きな姿勢があつてこそ真に民族主義に基づく他民族との共生が可能となるのではないだろうか。キリスト教世界とイスラム教世界もどちらも独善性・排他性を克服して、このような立場に立つてこそ、お互いの和解と共存共栄を実現できるのではないだろうか。このことが、掟と伝統への頑ななロドペの姿勢が引き起こした悲劇を考える時、ヘッベルのこの作品から引き出せる今日的な教訓と言えよう。

注

テキストはFriedrich Hebbel: „Gyges und sein Ring“, hrsg. von Gerhard Fricke, Werner Keller und Karl Pörnbacher, Bd.2, München (Hanser) 1964.を使用。なお、引用の後、()内に何幕何行と記す。

- (1) 松平千秋訳：『ヘロドトス』世界古典文学全集第10巻（筑摩書房）昭和42年、初版第1刷、6～9頁参照。
- (2) プラトン（藤沢令夫訳）：『国家（上）』（岩波書店）第21刷、1991年、108～109頁。（岩波文庫33-601-7）。
- (3) H. Kaiserも「ロドベは男に見られると必ず男の欲望の対象となる」と述べている。
Kaiser, Herbert: Friedrich Hebbel. Geschichtliche Interpretation des dramatischen Werks. München (Fink) 1983, S.106. (Uni-Taschenbücher 1226).
- (4) H. Stolteも「いたる所で我々を脅かす全体主義」と述べ、その危険性を指摘している。
Stolte, Heinz: Hebbels „Gyges und sein Ring“ im Lichte historischer Erfahrungen. In: Hebbel-Jahrbuch 1959, S.73.
- (5) Wiese, Benno von: Die deutsche Tragödie von Lessing bis Hebbel. 8. Aufl. Hamburg (Hoffmann u. Campe) 1973, S.627.
- (6) H. Kreuzerも「ロドベは人間としての自分の人権を主張するのではなく、女として、妻として、そして男女の奴隷を所有する王妃としての自分の権利を主張するのである」と述べて、筆者と同様の指摘をしている。
Kreuzer, Helmut: Friedrich Hebbels „Gyges und sein Ring“. Die Einheit der Konzeption. In: Hebbel-Jahrbuch 1959, S.87.
- (7) ユーディットは、敵将ホロフェルネス殺害の神託に従って彼を殺しに行くが、彼女が彼に女として侮辱されたことによる個人的な怨念が殺害の動機となっており、殺害時には彼女は神のことは全く失念していたのである。
拙論：「ヘッベルの『ユーディット』について」『名古屋大学文学部研究論集』第43号、1997年、106～107頁参照。
- (8) H. Stolteは「ロドベは明らかに勝者ギューゲスをとくに愛し始めていた。それゆえなおさら彼との新しい結婚は彼女には不可能だ」と述べているが、この主張には同意できない。本文でも述べてきたように、ロドベにはギューゲスへの愛は全く認められないからである。
Stolte, Heinz: a.a.O., S.71.

Resümee

Machtmissbrauch in Hebbels „Gyges und sein Ring“

Sumio SHIMIZU

Kandaules, der König von Lydien, genießt nur dann die Ehrfurcht seines Volkes, wenn er die alte Krone und das alte Schwert seines Ahnen Herakles achtet. Er wünscht aber, dass das Volk ihn auch ohne die beiden Erbstücke aufgrund seiner tatsächlichen Fähigkeiten als König anerkennt. Er führt deshalb eine neue Krone und ein neues Schwert ein. Er ersetzt sozusagen den Gebrauchswert durch den Tauschwert. Darin erweist er sich als Vorläufer kapitalistischen Denkens und ist deshalb ein Quasi-progressist. Das Volk aber erkennt den Wert dieser traditionslosen neuen Insignien nicht an und bedroht ihn. Kandaules' Stellung fängt an zu schwanken. Er braucht die Hilfe seiner Frau. Indem er Gyges ihren nackten Körper sehen und sich von ihm ihre absolute Schönheit bestätigen lässt, beabsichtigt er, seine Stellung abzusichern. Er glaubt nämlich, dass man ihn um den Besitz der absoluten Schönheit beneiden und ihn als deren Besitzer folglich hochachten wird. Dabei missachtet Kandaules den Wunsch seiner Frau, dass kein anderer sie erblicken darf, und verletzt ihr Sittlichkeitsgefühl.

Diese Tat ist sicher ein schweres Vergehen, aber sie hat auch eine positive Seite: Sie kann die Beseitigung patriarchalischer Sitten und der Ungleichbehandlung der Geschlechter herbeiführen sowie das Problem lösen, dass Rhodope die Kommunikation mit Männern verweigert, zu der sie als Königin die Pflicht hat. Die Verschleierung des Gesichtes ist auch ein aktuelles Problem, wie man in Frankreich erst kürzlich wieder erleben konnte. Den Schleier mit Gewalt zu lüften, ist trotzdem ein schweres Verbrechen, eine Verletzung der Menschenrechte, und deshalb ist das, was Kandaules getan hat, ein verwerflicher Machtmissbrauch. Seine Tat ähnelt den illegalen Lauschangriffen und verborgenen Abhöraktionen durch die Polizei heutzutage. Das heimliche Beobachten durch den Machthaber ist weitaus verwerflicher als die Missachtung der Sitten, weil diese Tat zur Voraussetzung hat, dass man den Menschen als Ding behandelt.

Andererseits wird sich Rhodope wegen der Beleidigung zum erstenmal ihrer Menschenrechte bewusst und will sich an Kandaules rächen. Wie bei Judith hat diese Tat ihren Grund in ihrem heftigen Zorn. Sie nimmt dabei keinerlei Rücksicht auf ihre angestammten Sitten. Das heißt, sie ist von den Sitten unabhängig. Würde sie sich nach diesen Sitten richten, ließe sich ihr früheres Verhältnis zu Kandaules wiederherstellen, falls er Gyges im Kampf besiegte. Aber dieser Weg zur Versöhnung scheint ihr keinesfalls begehbar. Das zeigt, dass für sie ihre Menschenrechte Vorrang vor den Sitten haben.

Rhodope facht die Begierde des Gyges nach ihr an und hetzt ihn zum Zweikampf mit Kandaules auf. Mit dessen Tod ist Rhodopes Rache befriedigt. Aber kurz nach der Trauung ersticht sie sich, um die Schuld am Gattenmord und an der Missachtung der Sitten zu sühnen und Gyges wegen seines heimlichen Beobachtens zu bestrafen. Obgleich sie sich dessen nicht bewusst ist, hat sie am Ende Kandaules und Gyges wegen ihres inhumanen Handelns verurteilt.